



|              |                                                                                       |
|--------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 第七五回美学会全国大会報告                                                                         |
| Author(s)    |                                                                                       |
| Citation     | a+a 美学研究. 2025, 16, p. 166-169                                                        |
| Version Type | VoR                                                                                   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/103424">https://hdl.handle.net/11094/103424</a> |
| rights       |                                                                                       |
| Note         |                                                                                       |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 第七五回美学会全国大会報告

高安啓介

第七五回美学会全国大会が、二〇二四年一〇月一二日（土）から一四日（月）の三日間、大阪大学中之島センターにて開催された。一日（日）午後のシンポジウムとそれに続くポスター発表会は、隣接する国立国際美術館の講堂でおこなわれた。三日間の参加者は、非会員も含めて三二四名。一般発表の発表者は三〇名、若手発表の発表者は三五名、合わせて二七の分科会が開かれた。ポスター発表会では、二五名が発表をおこなった。一日（日）夕刻の懇親会には一五一名が参加した。大阪大学美学研究室の大学院生一五名ほどがスタッフとして学会の手伝いにあたった。

本大会では「生きることの美学」をテーマとして次の課題をかけた。① カントを振り返りながら現代美学の拡張傾向について議論をおこなう。② アート作品と切り離せ

ないアーティストの生について考察する。③ 社会福祉とアートの関係について問い直す。

④ 幸福（ウェルビーイング）の本質について思案する。以上の課題をめぐって、四つの特別企画を催した。① カント生誕三〇〇周年を記念した特別分科会② ジョン・ラスキンとその影響についての特別展③ 知的障害者を主体とする映画制作についての懇談会④ 社会福祉とアートをめぐるシンポジウムである。

本大会のテーマ「生きることの美学」は、大阪大学美学研究室の教員スタッフの共通の関心事をあらわしたものであり、特別企画はそれぞれのネットワークを利用して実現された。また、テーマにそった企画に加えて、対面開催のメリットを最大限に生かすべく、独自スタイルのポスター発表会もおこなった。三日目には「美学会をもっと良くしようフォーラム」も実施した。参加者の協力によって、活発な意見交換がなされた。全体をとおして、若手研究者が生き生きと参加していたように見えた。

### 特別分科会

今日の美学の対象領域がますます広がるなかで、カント（以前）まで立ち返って、美学の根本について考え直したいという意図から、特別分科会「カントと美的なものの拡張」を企画した。カント生誕三〇〇周年というタイミングでもあり、発表募集の段階からカントに関係する研究発表を呼びかけた結果、三つの発表申し込みが寄せられた。出たとこ勝負の企画だったが、結果として『判断力批判』の文脈・分析・受容というバランスの取れた分科会となり、教育的でなおかつ最新の研究に触れられる良い機会となった。

「美学」の不在？

——一八世紀後半から一九世紀初頭にかけての美学の実像

桑原俊介（東京大学）

亀裂か、移行か

——カント批判哲学における美と道徳性

小林信之（早稲田大学）

クレメント・グリーンバークの美的判断論における主観性と客観性の問題

——そのカント的／非カント的側面の総合的理解を目指して

大澤慶久（東京藝術大学）

### 特別企画展

九月二〇日から一ヶ月間、大阪大学中之島センター四階ギャラリーにて「今に生きるラスキン」展を開催した。この展覧会は、美学会のテーマにも呼応するように、大阪ラスキン・モリスセンターの協力を得ながら準備をしてきた特別展である。ジョン・ラスキンは、美術批評家としてだけではなく、一九世紀英国において社会福祉活動に力を注いだ人物である。本展覧会では、大阪ラスキン・モリスセンターの収蔵資料をとおして、ラスキンの芸術への眼ざしや、社会への関わりや、環境保護への足がかりを紹介した。展覧会ではさらに、ラスキンの設立による聖ジョージ・ギルドや、日本のstudio-Tの取り組みにも注目して、ラスキンの思想がどのように社会活動へと波及してきたかを合わせて紹介した。ラスキンの言葉「生なくして富なし」に導かれて、この理想を具現化しようとする取

### 映画懇談会

一〇月一二日（土）一七時三〇分から一九時三〇分まで、大阪大学中之島センター三階スタジオにて、知的障害者を主体とする映画制作についての懇談会をおこなった。最初に、映画学を専門とする東志保（大阪大学）が、知的障害者をあつかった映画の歴史について解説したのち、デザインを専門とする工藤真生（九州大学）が、社会の側に障害があるという見地にもとづく映画制作プロジェクトの報告をおこない、映像作品の一部をじっさいに鑑賞する機会をもった。

二〇二三年六月から福岡の社会福祉施設「JOY倶楽部・アトリエブラヴォ」とともに始まった本プロジェクトは、知的障害を持つ人々がクリエイターの支援を受け、映画の被写体としてではなく、自ら映画を制作することを目指した珍しい取り組みで、障害者みずから自分を表現する機会を持つこと、そして、多くの人々が一人ひとりの障害者の感じ

かたに気づき、社会における障害の意味について考え、障害の多様性に出会うきっかけとすることを旨とするものである。

懇談会では、この取り組みへの本質的な問いが投げかけられた。このプロジェクトの成果を「映画作品」として世に問うのなら、誰に向けてのものなのか、どう鑑賞すべきものなのか、そもそもそれは不特定多数に「鑑賞」される性質のものだったのかと。当然、プロジェクトの当事者もそれを自問しながら事を進めていった経緯について、返答がなされた。新しいアプローチだからこそ、美学会の場において多数の参加者ともに、起こりうる問題について考えを共有できたのはよかった。

この催しには、美学会関係者だけでなく、他の学問分野から関心を持った方々や、障害をかかえる人々との同種の試みにたずさわってきた方々も参加していた。時間内におさまらないほど多くの質問が寄せられたため、予定時刻でいったん懇談会を打ち切って、期せずして、工藤氏を囲んで一五名ほどで「アフタートーク」をおこなうことになった。親密な雰囲気のもと、このプロジェクトを続ける困難や、今後の可能性や、社会の〈障害〉へ

の向き合いかたについて、一時間以上にわた  
り語り合った。

ドキュメンタリー映画における知的障害者

東志保（大阪大学）

社会の側に障害をかかえる人との映画制作

工藤真生（九州大学）

映画と〈障害〉をめぐる懇談

ゲストを囲んでのアフタートーク

## シンポジウム

一〇月一三日（日）に国立国際美術館に  
て、社会福祉と〈アート〉をめぐるシンポジ  
ウムをおこなった。社会福祉の領域において  
アートは、個人の心のケアや、社会包摂のよ  
うに、何かの目的にたいする手段として語ら  
れがちだが、アートはたんなる手段ではない  
という以上に、現実世界に生きる人々の活動  
のうちに融解しているという局面もあるよう  
に見受けられる。本シンポジウムでは、障害  
のある人の創作活動について研究をおこなっ  
てきた服部正（甲南大学）と、釜ヶ崎におい  
て長年アートを中心とした活動をおこなって

きた上田假奈代をパネリストに迎えて、議論  
をおこなった。

アール・ブリュットの居場所はどこにある

服部正（甲南大学）

わたしを束ねないで。

上田假奈代

（NPO法人こえとことばとこころの部屋）

コメントとディスカッション

田中均（大阪大学）

岩崎陽子（嵯峨美術短期大学）

## ポスター発表会

一〇月一三日（日）国立国際美術館の講  
堂にて、シンポジウム終了後、ポスター発表  
会をおこなった。ポスター発表という気軽に  
スタイルで、若手研究者にひらかれた場、進  
行中の研究について報告できる場、気軽に対  
話できる場とした。人の流れを活発にし、多  
くの研究に出会える場、多くの反応が得られ  
る場とした。シンポジウム登壇者もポスター  
をかまえ、来場者と話の続きができるように  
した。二五のポスターの半数ごとに、五分の

発表と一〇分の質疑からなるセッションを繰  
り返した。一時間かけて四回のセッションを  
おこなった。想定以上の参加のため、混雑し  
てしまい、声が聞き取りにくく、移動しにく  
くなったが、会場が熱気につつまれた。な  
お、美学会の会期中、発表会場の廊下にポス  
ターを展示して、来場者の目にとまるように  
した。

## 美学会をもっと良くしようフォーラム

閉会式まえの時間を利用して「美学会を  
もっと良くしようフォーラム」を開催した。  
従来、美学会委員会において学会改革につ  
いて議論がおこなわれてきたが、委員会に居  
合わせていない会員の声をもっと聞こうとい  
う主旨の企画であり、大会のあいだ告知して  
きた結果、多くの若い会員の参加を得ること  
ができた。最初に、司会の高安啓介（大阪大  
学）が、どんな意見でもいいが、問題・理  
想・解決のどれについての意見であるかを明  
確にしたいという提案をおこなった。続けて  
とくにテーマを定めずに、成り行きで意見を  
出し合った。

学会の「問題」としては、大会の閉会ま  
えということとで全国大会のプログラム編成に  
ついて意見があった。高い会費やフリーライ  
ドという触れにくい問題にもおよんだ。学会  
の「理想」については、学会が一種のコミュ  
ニティであるという認識がしめされ、それが  
どうあるべきかが問われた。問題の「解決」  
については、学会賞の創設、学生の優遇策、  
会費以外の財源など、多岐にわたる提案がな  
された。古参の会員からも、若手の会員から  
も、バランスよく発言があった。忌憚のない  
意見交換ができたと思う。ウェブサイトから  
意見を見ることができるようになっている。

## 振り返って

以前、大阪大学において美学会全国大会  
がおこなわれたのは二〇〇六年で、もっと早  
くに大会を引き受けてもよかったが、大阪大  
学中之島センターの改修が終わるのを待つて  
いただいた経緯がある。そのため、一年以上  
前から同僚たちと話し合いを持ち、今回の企  
画に関係する方々とともに社会福祉とアート  
についての勉強会をおこなったりもした。ま  
た、西部会でポスター発表の試行をおこな  
い、参加者の意見を聞いたこともあった。今  
回の全国大会は、まさに満を持しての開催と  
なった。押し付けがましくも、開催校のカ  
ラーを出すことができたと思うが、準備をと  
おしてそれは見出されたものである。芸術活  
動と同じように、何かを表現することはすな  
わち自己発見の道だということを悟ったの  
だった。

美学会大会の準備はたいへんで、どこの  
大学もやすやすとは引き受けたくないだろ  
う。今回、紙の要旨集をやめるなどのペー  
パレス化や、弁当の廃止、ハガキ連絡の廃  
止など、従来の手間を少なくしたぶん、テー

マにもとづく当番校企画に全力を注いだ。大  
阪大学はわりあい教員スタッフや大学院生に  
恵まれているが、開催校以外の助力も得るこ  
とができ、運営面ではずいぶん助かった。今  
回、新しいやりかたや、新しい企画を幾つも  
試みることができたのは、関係者の寛大さの  
おかげである。行き届かなかったところも含  
めて、今後の学会に役立てていただけたら幸  
いである。やるかやらないかではなく、トラ  
イ&エラーの繰り返しによって学会は良くな  
るだろうと信じている。

## ■第七五回美学会全国大会実行委員会

高安啓介（大阪大学）  
田中均（大阪大学）  
東志保（大阪大学）  
渡辺浩司（大阪大学）  
西井奨（大阪大学）  
横道仁志（大阪大学）  
里中俊介（大阪大学）  
岩崎陽子（嵯峨美術短期大学）  
三木順子（神戸女学院大学）